

マルチモダリティー時代の3検出器SPECT装置の利点と役割

演者

國正 妙子 先生（東邦大学医療センター大橋病院 循環器内科）

概要

冠動脈疾患のマネージメントにSPECT, 冠動脈CT(FFR-CT), MRIなどマルチモダリティーが使用される時代となった。FFRが太い冠動脈の狭窄の判定に使用されるのに対し、SPECTは太い冠動脈から毛細血管さらには心筋細胞機能までの虚血が反映される。

SPECT検査の強みは虚血心筋量の定量であり、左室壁全心筋の10%以上の虚血を有する患者は血行再建を追加した方が薬物療法より予後がよいとする報告や血行再建を行った場合に5%以上の虚血心筋量の改善が得られれば予後改善が期待できるとする報告がある。これらのエビデンスを冠動脈疾患のマネージメントに活用すべきである。

一方、以前よりSPECTの弱点はアーチファクトの存在であり、当院では年間700件弱のSPECT検査を行っているが、アーチファクトに悩まされるケースも少なくない。

当院は2018年6月にSPECT装置が2検出器から3検出器に切り替わった。総合病院における3検出器SPECT装置の利点と冠動脈疾患マネージメントにおける役割について紹介する。

